

2021年9月5日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

イザヤ書 53 : 11

ルカによる福音書 17 : 22～25

「既に・未だ」

<既に>

前回の箇所 17 : 20～21 は、ユダヤ人のファリサイ派と呼ばれる人々が、イエスさまに質問をした場面でした。それは、「神の国はいつ来るのか」という質問です。

神の国とは、神のご支配、ということです。神の民イスラエルの子孫であるユダヤ人は、このイエスさまの時代、国を失い、異邦人に支配されていました。そんな中で彼らは、神の国が来る日、つまり神のご支配が実現する日を、待ちわびていたのです。それは、自分たちのイスラエル王国の復興の日として。敵が蹴散らされ、神の民が再び栄華を極めるような、理想の国が実現する日として、心から待ち望んでいたのです。

わたしたちもまた、「神の国」と聞くと、平和に満ちた、満たされた、理想の桃源郷のようなところを想像するかも知れません。

しかし、イエスさまは教えられました。神の国とは、人々の願いが叶う国、理想が実現する国ではない。神さまのご支配のもとで生きること。神さまと共にあるということ。それが神の国なのです。

そして、この時まさに、神の御子イエスさまが、この世に来られて、彼らの目の前に立っておられる。彼らと共におられる。ここに既に、神の国が実現し、神のご支配が始まっているのです。

イエスさまは言われました。「実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」神の支配は、あなたがたの間に立っているわたし、あなたがたの目の前にいるわたしによって、既に実現し、始まっているのだ。そう語られたのです。

しかし、ファリサイ派の人々は、イエスさまが神から遣わされた救い主であること、神の御子であるということ、受け入れようとしなかったのです。

<未だ>

さて、今日はその続きです。22 節には「それから、イエスは弟子たちに言われた」とあります。弟子たちは、ファリサイ派とは違って、イエスさまを神に遣わされた「救い主」と信じて従っている者たちです。ルカによる福音書の 9 : 20 には、イエスさまが弟子たちに「あなたがたはわたしを何者と言うのか」と問われ、ペトロが「神からのメシアです」と答えたことが語られていました。

つまり弟子たちは、イエスさまを救い主として受け入れ、神の国に生き始めている。イエスさまが実現して下さっている神のご支配の中で、既に生き始めている者たちです。それは、

今ここにイエスさまを信じて集められている、わたしたち信仰者のことでもあります。

今回イエスさまは、この弟子たちに、信じる者たちに、語りかけられました。

それは、既に神の国がイエスさまによって到来していることを信じている者であるからこそ、見つめなければならない現実があり、受けなければならない苦しみがあるからです。

それは、他の人々がイエスさまを信じないで、既に到来している神の国を無視して歩んでいるという現実です。また、弟子たちやわたしたち自身においても、神のご支配に生きているにも関わらず、迫害に遭ったり、苦しみ悲しみや、困難が襲ってくるという現実です。

神の国はイエスさまによって到来し、実現していますが、まだ、すべての人の目には明らかにされていないし、この世において完全に実現してはいません。

つまり、神の国は、既に、実現しているけれども、未だ、完成はしていないのです。

イエスさまは、そのように、既に実現し、そして未だ完成していない神の国を生きている弟子たち、わたしたちに対して、この現実の中を、何を見つめて生きていくべきか。どのように歩いていくべきか。そのことを教えようとしておられるのです。

<人の子を見たい>

さて、イエスさまは 22 節でこのように言われました。

「あなたがたが、人の子の日を一日だけでも見たいと望む時が来る。しかし、見ることはできないだろう。『見よ、あそこだ』『見よ、ここだ』と人々は言うだろうが、出て行ってはならない。また、その人々の後を追いかけてもいけない。」

イエスさまは、弟子たち、わたしたちが、「人の子の日」を一日だけでも見たい。つまり、イエスさまが神の国を完成させて下さる終末の日を見たい。そう切望する時が来る。と言われます。

なぜ、わたしたちが、人の子の日を切望するようになるのか。それは、先程も言いましたように、弟子たち、わたしたちが、イエスさまが実現して下さった神の支配の現実生きていたとしても、なお多くの苦しみや困難を経験したり、迫害に遭ったり、辛い思いをしたりするからです。どこに神さまのご支配があるのかと言いたくなるような、悲惨を目にするからです。世界中に、まだ、神さまの恵みのご支配が、すべての人の目に見える形では現れていないからです。

わたしたちが、神の国の完成の時を、心から待ち望むこと。それは決して悪いことではありませんし、むしろ、そこにこそ希望を置くことが大切です。

しかし、神の国の完成を待ち望むことが、わたしたちの現実逃避となっはいけないのです。未来のことばかりを見つめて、今歩んでいる現実がおろそかになっはいけないのです。神の国の完成は、今の苦しみを早く終わらせる手段として、悲惨さから逃げ出す手段として、一日も早く来て欲しいと待ち望むものではないのです。

神の国の完成は、わたしたちが願う時に、願うような仕方に来るのではありません。神さまが定められた時に、神さまの仕方によって来るのです。

だから人々が「見よ、あそこだ」「見よ、ここだ」という言葉に惑わされてはならない、とイエスさまは言われます。

神の国の完成を、今の苦しみを解決することとして期待すればするほど、わたしたちはそのような噂に、心を惑わされてしまうかも知れません。世の人々の気を引こうと、人々は勝手に、あれが神の国だ、これがメシアだ、もう終わりの日が来るなどと、好き勝手に言い出します。今この時も、わたしたちはそんなデマや、噂を耳にすることがあるかも知れません。

でも、それにつられて「出て行ってはならない。また、その人々の後を追いかけていってもいけない」のです。

この「出て行く」という言葉は、「離れていく」「外れていく」という意味の言葉です。わたしたちは、いつ、どこに来るのかを知ることが出来ない神の国の完成の時を切望するあまりに、人々の言うことに惑わされて、歩むべき道から離れてはならないのです。今歩んでいるところから、外れてはならないのです。

人の子の日、イエスさまの神の国の完成の日は、人が「見よ、あそこだ」「見よ、ここだ」と言えるような形では来ないのです。

<稲妻のように>

では、どのようにその日は来るのでしょうか。イエスさまは言われます。「稲妻がひらめいて、大空の端から端へと輝くように、人の子もその日に現れるからである。」

人の子、つまり再び来られるイエスさまは、神の国を完成させて下さる日に、稲妻がひらめいて、大空の端から端へと輝くように現れます。

稲妻がひらめいたら、大空の端から端へピカッと輝いて、見たい人、見たくない人に関わらず、否応なしにすべての人の目に光が飛び込んできます。「見よ、あそこに稲妻が」と誰に教えられなくとも、すべての人が同時に稲妻を認識することが出来ます。

イエスさまもまた、終わりの日に、そのようにすべての人が同時に分かるような仕方に来られるというのです。

ですから、人の子が来ているのに、ある人はそれに気付かないということはないし、一部の人が「あそこだ」「ここだ」と他の人に教えるものでもないのです。

終わりの日には、誰に目にも明らかな仕方で、稲妻が大空の端から端へと輝くように、イエスさまは現れる。すべての人に、はっきりと神さまのご支配が明らかにされる。それが、人の子の日、イエスさまによる神の国の完成の日、終末の日だということです。

<苦しみを受ける人の子>

そうであるなら、わたしたちは、今はいつ来るか分からない、人の子の日、神の国の完成の時を、あてもなく、漠然と見つめて、待ち続けるのではないのです。

ここで、イエスさまはわたしたちに、今既に、イエスさまが実現して下さった神のご支配。今、わたしたちが、確かに神さまの恵みの中を歩んでいるという現実、目を向けさせられます。

イエスさまは、人の子が、つまりご自分が、終わりの日、神の国を完成する時に、稲妻のように輝いて現れる、ということ語られた後、25節で弟子たちに、このように語られました。「しかし、人の子はまず必ず、多くの苦しみを受け、今の時代の者たちから排斥されることになっている。」

この弟子たちとのやり取りをされている時、イエスさまは、彼らと共にエルサレムへ向かっておられる途中です。それは、殺されるため。そして復活し、天に上げられるためであると、イエスさまは繰り返し弟子たちに教えてこられました。

この世に来られて、弟子たちと共に歩み、神の国を実現し始められたイエスさまは、これから、まず、世のすべての人々の罪を贖うために、十字架に架かって死ななければならなかったのです。人々に罵られ、殴られ、辱めを受けられ、そして弟子たちに裏切られ、神に見捨てられたと叫ぶ、そのような人の絶望の果てにまで、降らなければならなかったのです。イエスさまが実現し始められた神の国は、その輝かしい完成の前に、まずイエスさまの御苦しみがなければならぬのです。

それは、この苦しみによって、わたしたちと同じ人間となられた神の御子イエスさまが、人の苦しみも、悲しみも、罪も、死も、滅びも、すべてを引き受けて下さるためです。

この十字架によってこそ、神さまの救いの御業は成し遂げられます。十字架の苦しみと死によってこそ、イエスさまはわたしたちの罪と死を打ち滅ぼし、恵みと命に満ちた神のご支配を、わたしたちの間に打ち立てて下さったのです。

だからわたしたちは、たとえこの世が、苦しみや、死に支配されているように思える時にも、漠然と未来の神の国の完成を思うことによってではなく、イエスさまがお受けになった十字架の苦しみと死を見つめることによってこそ、この世界に、このわたしたちに、確かに神のご支配が実現していることを信じ、希望を見出すことが出来るのです。

<苦しみから栄光へ>

そして父なる神さまは、十字架の死によって、救いの御業を成し遂げられたイエスさまを、死者の中から復活させられ、天に上げられました。弟子たちはこれから経験することですが、わたしたちは、もう既にそれが実現したことを知らされています。

救い主イエスさまは、苦しみを通って、栄光に至らせられました。十字架の死を通って、復活の命へと至らせられました。それが、父なる神さまがお定めになった救いの道筋です。

イエスさまが、まず苦難を通って、そして復活の栄光に至られた。だから、わたしたちがイエスさまの後に従っていく中で、今まさに通っている苦難の道も。これから通るであろう

苦難の道も。やがてわたしたちに訪れる死でさえも。それは、イエスさまが既に通られた道なのであり、それはやがて、神さまによって復活と栄光に至らせられる道であるに、違いないのです。

<既に・未だ>

わたしたちは信仰の歩みの中で、苦しみや、困難や、恐れの中にある時、既に、イエスさまによって実現している神の支配に捕らえられていることを、忘れてはなりません。

わたしたちは、既にこの世界の、この歴史の中で確かに起こった、イエスさまの十字架の出来事によって、わたしたちの悲惨さの只中に、共にイエスさまが立って下さっていることを見出します。そこにこそ、まことの慰めと平安を得ることが出来るのです。そして、十字架の死からのイエスさまの復活を信じ、やがて来る完成の日を、わたしたちの復活の日として、確かな希望の日として、忍耐強く待つことが出来るのです。

未だ、実現していない神の国の完成は、今、既に、イエスさまによって実現している神の国に生かされているということを信じることによって、まことの希望として、確かな約束として、見つめることが出来るのです。

神の国の完成の時は、未だ、来ていません。人の子の再臨は、未だ、ありません。

しかし、既にわたしたちはイエスさまの十字架によって、苦しみも、罪も、死も、担われた者であるということ。既に、イエスさまによって実現し始めている、神の恵みのご支配の中に立っているということ。既に、確かに、神の国は始まっていることを知らされています。

それはまだはっきりとすべての人の目には見えません。しかし、イエスさまの十字架によって打ち立てられた、今ここに、確かにある、神の恵みの現実です。

この神のご支配をしっかりと見つめているならば。イエスさまが再び来られる日が、神の国の完成の日が、たとえ明日であろうとも。たとえ千年後であろうとも。わたしたちは既に今、神の恵みに捕らえられていることに安んじて、イエスさまに抱かれ、生かされ、支えられている今日のこの日を、感謝を持って、大切に、しっかりと地に足をつけて歩いていくことが出来るのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

イエスさまの十字架の御苦しみと復活によって、わたしたちに神のご支配を実現して下さったこと。今既に、イエスさまによる罪の赦しと、新しい永遠の命と、復活の約束に生きる者とされていることを、感謝いたします。

わたしたちは、世の悲惨さや、自分の苦しみ、悲しみを見つめる時に、今、生きておられる主が共にいて下さる恵み、十字架と復活の主が、わたしたちを担って下さっている恵みを忘れ、地に足がつかなくなり、色々な声に惑わされるようになってしまいます。

どうか、わたしたちがイエスさまの十字架の恵みにこそ踏み止まり、そこにこそ慰めと希望を置き、あなたに向かう道を離れたり、外れたりすることがありませんように。

そして、十字架のイエスさまの御跡をたどって、わたしたちもやがて復活に至り、神の国の完成をこの目で見させていただく日が来ることを、確かな希望として待ち望むことが出来ますように。

イエスさまの御名によって祈ります。アーメン